

博士論文(要約)

論文題目

中世日記文学の研究—阿仏尼から『とはずがたり』へ—

氏名 高木 周

「中世日記文学の研究―阿仏尼から『とほすがたり』へ―」

【目次】

序章 4

第一部 阿仏尼の研究

第一章 『阿仏の文』論―后がねの心構えをめぐって― 12

第二章 『十六夜日記』の鎌倉滞在記について―贈答歌を中心に― 27

第二部 『とほすがたり』の研究

第一章 二条の父の死をめぐる物語性と託宣 46

第二章 卷二の「傾城」と二条 64

第三章 卷二の女楽―「思ひ切りぬる四つの緒」― 79

第四章 歌語表現の反復について―いつまで草・なるみ・心の色― 94

第五章 卷五の故人の形見について 110

第三部 中世日記の西行受容

第一章 『うたたね』・『十六夜日記』における西行の影響 127

第二章 『とほすがたり』卷四の東国下向における西行の影響 145

第三章 『とほすがたり』の後深草院思慕と西行の月の歌 163

初出一覧 178

【本文】

本博士論文の全文は、今後五年以内に出版予定である。

【参考文献一覧】

◆例言

久保田淳校注『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』（新編日本古典文学全集）（小学館、一九九九年）

岩佐美代子校注「十六夜日記」（『中世日記紀行集』（新編日本古典文学全集）小学館、一九九四年）

永井義憲校注『うたゝね』（影印校注古典叢書）（新典社、一九八〇年）

『新編国歌大観』（角川書店）

『新編日本古典文学全集』（小学館）

『新潮日本古典集成』（新潮社）

◆序章

三角洋一校注『とはすがたり たまきはる』（一九九四年、岩波書店）

福田秀一・岩佐美代子・川添昭二・大曾根章介・久保田淳・鶴崎裕雄校注『中世日記紀行集』（一九九〇年、岩波書店）

久保田淳校注『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』（一九九九年、小学館）

長崎健・外村南都子・岩佐美代子・稲田利徳・伊藤敬校注『中世日記紀行集』（一九九四年、小学館）。

◆第一部第一章

岩佐美代子『乳母のふみ』考」（『宮廷女流文学読解考 中世編』笠間書院、一九九九年）

田渕句美子『阿仏尼（人物叢書）』（吉川弘文館・二〇〇九年）

田渕句美子『紫式部日記』消息部分再考―『阿仏の文』から―」（『国語と国文学』八五―一、二〇〇八年十二月）

今井源衛「女子教訓書および艶書文学と源氏物語」（『源氏物語の研究』東京大学出版会、一九七四年）

向井たか枝『庭の訓』（めのとの文）と『源氏物語』―女子教訓書と遺言―」（『平安文

- 学研究』七一、一九八四年六月)
- 田渕句美子「阿仏尼の『源氏物語』享受―『乳母のふみ』を中心に―」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識28蜻蛉』至文堂、二〇〇三年)
- 松本寧至『中世女流日記文学の研究』(明治書院、一九八三年) 二章「阿仏尼の文学」
- 田渕句美子『阿仏尼とその時代―『うたたね』が語る中世―』(臨川書店、二〇〇〇年)
- 中野貴文『『乳母のふみ』考―文学史的な位置付けをめぐって―』(『国語と国文学』八〇―一〇、二〇〇三年一〇月)
- 築瀬一雄『校註阿仏尼全集増補版』風間書房、一九八一年)
- 太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(勉誠社、一九八二年)
- 近藤春雄『新楽府・秦中吟の研究 白氏文集と国文学』(明治書院、一九九〇年)
- 森藤侃子「冷泉妃昌子内親王」(『日本文学 始源から現代へ』笠間書院、一九七八年)
- 池田尚隆『『栄花』と『源氏』と『小右記』―藤原城子記事を中心に―』(『山梨大学教育学部研究報告』三九、一九八九年二月)
- 池田尚隆『『栄花物語』の三条朝』(『山梨大学教育学部研究報告』三七、一九八七年二月)
- 松本寧至『とはずがたりの研究』(桜楓社、一九七一年)
- 標宮子『とはずがたりの表現と心』(聖学院大学出版会、二〇〇八年)
- 服部一隆「城子立后に対する藤原道長の論理」(『日本歴史』六九五、二〇〇六年四月)
- 井上宗雄「阿仏尼伝の一考察」(『鎌倉時代歌人伝の研究』風間書房、一九九七年)
- 『紫式部日記』(新編日本古典文学全集)
- 『極楽寺殿消息』『寛平御遺誠』『九条右丞相遺誠』(日本思想大系)
- ◆第一部第二章
- 岩佐美代子校注「十六夜日記」(『中世日記紀行集』小学館、一九九四年)
- 岩佐美代子『十六夜日記』考察と翻刻」(『宮廷女流文学読解考 中世編』笠間書院、一九九九年)
- 中野貴文『十六夜日記』鎌倉滞在記の消息的性格について」(『中世文学』五三、二〇〇八年六月)
- 森本元子『十六夜日記・夜の鶴全訳注』(講談社、一九七九年)
- 武田孝『十六夜日記詳講』(明治書院、一九八五年)

- 築瀬一雄・武井和人『十六夜日記・夜の鶴全釈』（和泉書院、一九八六年）
- 福田秀一『中世日記紀行集』（岩波書店、一九九〇年）
- 田辺麻友美『安嘉門院四条五百首』攷―『十六夜日記』との関わりを中心に―（『和歌文学研究』75、一九九七年一二月）
- 森井信子「安嘉門院四条五百首について」（『鶴見日本文学』2、一九九八年三月）
- 島津忠夫「安嘉門院四条五百首と十六夜日記」（『国語国文』三一―一、一九六二年一月）
- 『島津忠夫著作集八卷』（和泉書院、二〇〇五年）
- 『冷泉家時雨亭叢書三一卷 中世私家集七』（朝日新聞社、二〇〇三年）
- 高田与清『十六夜日記残月抄補註』（國學院大學出版部、一九〇九年）
- 久保貴子『十六夜日記』鎌倉滞在記―考―安嘉門院女房としての視座―」（『日記文学研究誌』七、二〇〇五年三月）
- 岩佐美代子「大宮院権中納言―若き日の従二位為子―」（『和歌文学新論』明治書院、一九八二年）
- 安田徳子『十六夜日記』鎌倉滞在の記について―大宮院権中納言と和徳門院新中納言をめぐって―（『岐阜聖徳学園大学国語国文学』一八、一九九九年三月）
- 三角洋一『十六夜日記』の「鎌倉滞在の記」について」（『論集日記文学』笠間書院、一九九一年）
- 田渕旬美子『十六夜日記白描淡彩絵入写本・阿仏の文』（勉誠出版、二〇〇九年）
- 『大正新修大藏經』第十四卷
- 今関敏子『中世女流日記文学論考』四章二節（和泉書院、一九八七年）
- 江口正弘『十六夜日記校本及び総索引』（笠間書院、一九七二年）
- 森本元子「康資王母と常陸介基房」『古典文学論考』（新典社、一九八九年）
- 森本元子『私家集の女流たち』（教育出版センター、一九八五年）
- 『私家集大成中古Ⅱ』（明治書院、一九七五年）
- 久保木哲夫「家の風」―『後拾遺集』と大中臣家―」（『フェリス女学院大学国文学論叢』一九九五年六月）
- ◆第二部第一章
- 福田秀一『中世文学論考』（第一章Ⅰ）（明治書院、一九七五年）
- 清水好子「古典としての源氏物語―』とはすがたり』執筆の意味―」（『源氏物語及び以

- 後の物語研究と資料』武蔵野書院、一九七九年)
- 辻本裕成「同時代文学の中の『とはずがたり』」(『国語国文』五八巻一号、一九八九年一月) 三角洋一『とはずがたり』(岩波セミナーブックス)(岩波書店、一九九二年)
- 三角洋一『とはずがたり たまきはる』(岩波書店、一九九四年)
- 向井たか枝『庭の訓』(めのとの文)と『源氏物語』―女子教訓書と遺言―(『平安文学研究』七一、一九八四年六月)
- 松本寧至『中世女流日記文学の研究』(明治書院、一九八三年)
- 河添房江「女流日記における父親像―『とはずがたり』を中心に―」(『女流日記文学講座 第一巻』勉誠社、一九九一年)
- 小木喬『いはでしのぶ物語 本文と研究』(笠間書院、一九七七年)
- 伊井春樹「いはでしのぶ物語構想論―伏見宮の姫君たちの運命をめぐって―」(『源氏物語論考』風間書房、一九八一年)
- 神野藤昭夫『しのびね物語』の位相―古本『しのびね』・現存『しのびね』・『しぐれ』の軌跡―(『散逸した物語世界と物語史』若草書房、一九九八年)
- 樋口芳麻呂『平安・鎌倉散逸物語の研究』(第二章九節)(ひたく書房、一九八二年)
- 妹尾好信『中世王朝物語全集2』(解題)(笠間書院、一九九五年)
- 妹尾好信『海人の刈藻』私見(『国文学攷』一二六、一 一九九〇年六月)
- 三角洋一『海人の刈藻』の文学史的位相(『王朝物語の展開』若草書房、二〇〇〇年)
- 桑原博史『とりかへばや四 全訳注』(七一頁)(講談社、一九七九年)
- 『冷泉家時雨亭叢書第四三巻』(朝日新聞社、一九九七年)
- 横溝博「冷泉本による『いはでしのぶ物語』補訂攷―三条西家本その他巻記事についての復元と考証―」(『平安朝文学研究』復刊七、一九九八年一月)
- 村田紀子『とはずがたり』における東二条院について(『文芸と批評』六巻八号、一九八八年一〇月)
- 三角洋一「『とはずがたり』後篇の意図と構成」(『ミメーシス』二、一九七二年六月)
- 寺尾美子「『とはずがたり』に於ける心情的基盤についての一考察―父と娘の心の交流をめぐって―」(『駒沢国文』二二、一九八四年二月)
- 細川涼一「小野小町説話の展開」(『女の中世 小野小町・巴・その他』日本エディターズスクール出版部、一九八九年)

寺尾美子『『とはずがたり』の旅における小町幻想とその現実』（『日記文学研究 第一集』新典社、一九九三年）

稲田利徳「八幡信仰と中世和歌―「ひとのひとより」をめぐって―」（『国語と国文学』七四―八、一九九七年八月）

久保田淳『とはずがたり二』（小学館、一九八五年）

大曾根章介・久保田淳「海道記」（『中世日記紀行集』岩波書店、一九九〇年）

中田祝夫・峯岸明『色葉字類抄研究並びに総合索引 黒川本影印篇』（風間書房、一九七七年）

『風葉和歌集』・『玉造小町子壮衰書』（岩波文庫）

『しのびね』・『海人の刈藻』（中世王朝物語全集）

『八幡愚童訓』（日本思想大系）

『海道記』（新日本古典文学大系）

◆ 第二部 第二章

富倉徳次郎『とはずがたり』（筑摩書房、一九六九年）

細川涼一「鎌倉時代の尼と尼寺」（『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、一九八七年）

加賀元子『『とはずがたり』における「遊女」―その意義―』（『武庫川国文』42号、一九九三年一月）

小川寿子「後深草院二条と遊女発心譚―その今様環境と興味に触れて―」（『梁塵 日本

歌謡とその周辺』桜楓社、一九八七年）

勝浦令子「尼削ぎ攷」（『女の信心』平凡社、一九九五年）

三木紀人『今物語全訳注』（講談社、一九九八年）

三角洋一『とはずがたり たまきはる』（岩波書店、一九九四年）

西尾光一・小林保治『古今著聞集』（新潮社、一九八三年）

阿部泰郎『『とはずがたり』と中世王権―院政期の皇統と女流日記をめぐりて―』（『日本文学史を読むⅢ中世』有精堂、一九九二年）

加賀元子「後深草院二条と雨夜の〈傾城〉―『とはずがたり』小考」（『武庫川国文』62号、二〇〇三年一月）

久保田淳「女人遁世」（『岩波講座日本文学と仏教 第四卷』岩波書店、一九九四年）

久保田淳『とはずがたり 一（完訳日本の古典）』（小学館、一九八五年）

- 三角洋一『とはすがたり(古典講読シリーズ)』(岩波書店、一九九二年)
- 阿部泰郎「王の導師―とはすがたり』における唱導のことば」(『國文學(解釈と教材の研究)』46巻14号、二〇〇二年一月)
- 市古貞次・三角洋一『鎌倉時代物語集成別巻』(笠間書院、二〇〇一年)引歌索引
- 時枝誠記・木藤才蔵『神皇正統記・増鏡』(岩波書店、一九六五年)
- 『撰集抄』(松平文庫本)(久保田淳『西行全集』)
- 『大和物語』(日本古典文学大系)
- 『今物語』(講談社学術文庫)
- 『なよ竹物語』(鎌倉時代物語集成)
- 「李夫人」(『神田本白氏文集の研究』)
- 「長恨歌」(『金澤文庫本 白氏文集』)
- 『横川法語』(恵心僧都全集)
- 『宝物集』(新日本古典文学大系)
- 『法華経』(岩波文庫)
- 『雑談集』(中世の文学)
- 『苔の衣』(中世王朝物語全集)
- 『いはでしのぶ』『いはでしのぶ物語本文と研究』
- 『平家物語』(校訂延慶本平家物語)
- ◆第二部第三章
- 望月俊江「源通光―その歌人としての生涯―」(『立教大学日本文学』50号、一九八三年七月)
- 岩佐美代子『文机談全注釈』(笠間書院、二〇〇七年)
- 『琵琶血脈』、『琵琶合記』、『秘曲伝受月々例』(『伏見宮旧蔵楽書集成一(図書寮叢刊)』明治書院、一九八九年)、
- 『残夜抄』(『伏見宮旧蔵楽書集成三』一九九八年)
- 磯水絵『説話と音楽伝承』第一章の三(和泉書院、二〇〇〇年)
- 須田亮子『とはすがたり』後深草院二条と五部大乘経の書写供養―祖父通光の影響をめぐって―(『国文論藻』三、二〇〇四年三月)
- 標宮子『とはすがたりの表現と心』三編一章(聖学院大学出版会、二〇〇八年)

- 『秦箏相承血脈』(『伏見宮旧蔵楽書集成二』(一九九五年))
- 相馬万里子『代々琵琶秘曲御伝授事』とその前後―持明院統天皇の琵琶―(『書陵部紀要』36号、一九八五年二月)
- 阿部泰郎『とはすがたり』の今日的課題―琵琶秘曲伝授をめぐる―(『とはすがたり』の諸問題』和泉書院、一九九六年)
- 阿部泰郎「芸能王の系譜」(『天皇と芸能(天皇の歴史10)』講談社、二〇一一年)
- 松本寧至『とはすがたりの研究』三章「作者研究」(桜楓社、一九七一年)
- 三角洋一『とはすがたり(古典講読シリーズ)』(岩波書店、一九九二年)
- 豊永聡美『中世の天皇と音楽』第二部第三章(吉川弘文館、二〇〇六年)
- 高橋秀樹『文机談』にみる音楽の家」(『日本文学』五二―七、二〇〇三年七月)
- 松村雄二『とはすがたり』のなかの中世』(臨川書店、一九九九年)
- 加賀元子『とはすがたり』における「遊女」(『武庫川国文』42号、一九九三年二月)
- 加賀元子「数ならぬ身」考」(『とはすがたり』の諸問題』和泉書院、一九九六年)
- 木船重昭『続古今和歌集全注釈』(大学堂書店、一九九四年)
- 外村展子『宇都宮朝業日記全釈』(風間書房、一九七七年)
- 外村南都子「信生法師日記歌集部」(『中世日記紀行集』小学館、一九九四年)
- 久保田淳『西行全集』(日本古典文学会、一九八二年)
- 『平家物語』(日本古典文学大系)
- ◆第二部第四章
- 岩佐美代子『とはすがたり』読解考 五 小夜衣」(『宮廷女流文学読解考 中世編』笠間書院、一九九九年)
- 福田秀一「いつまで草」と「安の河原」―『とはすがたり』注解補正その二―(『解釈』二七卷一号、一九八一年一月)
- 三角洋一『とはすがたり たまきはる』(岩波書店、一九九四年)
- 久保田淳『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』(小学館、一九九九年)
- 『新編国歌大観第四卷』(角川書店、一九八六年)の『堀河百首』解題(橋本不美男・滝澤貞夫)
- 久保田淳「和歌植物誌⑩」(和歌文学大系月報1200二年七月)
- 松村博司『栄花物語全注釈三』(角川書店、一九七二年)

- 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進『棠花物語二』（小学館、一九九七年）
- 市古貞次・三角洋一『鎌倉時代物語集成別巻』（笠間書院、二〇〇一年）の引歌索引
- 久保田淳『とはずがたり一』（小学館、一九八五年）
- 久保田淳『西行全集』（日本古典文学会、一九八二年）所収「松屋本書入六家集本」
- 渡辺仁作「心の色」（『解釈』三三巻九号、一九八七年九月）
- 松村雄二「心の色」（『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年）
- 渡辺静子『『とはずがたり』における和歌撰取の位相』（『中世日記文学論序説』第二章第二節、新典社、一九八九年）
- 久保田淳『とはずがたり二』（小学館、一九八五年）の「引歌一覽」
- 富倉徳次郎『とはずがたり』（筑摩書房、一九六九年）
- 次田香澄『とはずがたり全訳注 下』（講談社、一九八七年）
- 『徒然草』（新日本古典文学大系）
- 『苔の衣』・『浅茅が露』（中世王朝物語全集）
- ◆第二部第五章
- 松本寧至『とはずがたり下巻』（角川書店、一九六八年）
- 福田秀一『とはずがたり』（新潮社、一九七八年）
- 次田香澄『とはずがたり全訳注 下』（講談社、一九八七年）
- 三角洋一『とはずがたり たまきはる』（岩波書店、一九九四年）
- 岩佐美代子『『とはずがたり』読解考』（『宮廷女流文学読解考 中世編』笠間書院、一九九九年）
- 『花園天皇宸記二（史料纂集）』（続群書類従完成会、一九八四年）
- 樋口芳麻呂『隆信集全釈』（風間書房、二〇〇一年）
- 『新編国歌大観』第四卷（元久本『隆信集』）
- 村重寧「後鳥羽院像と信実」（『MUSEUM』476号、一九九〇年一月）
- 村重寧『日本の美術 三八七 天皇と公家の肖像』（至文堂、一九九八年八月）
- 宮島新一『肖像画（日本歴史叢書）』（吉川弘文館、一九九四年）
- 岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈下巻』（笠間書院、一九九六年）
- 佐藤久美子「後拾遺和歌集における出羽弁歌について」（『国文』69、一九八八年七月）
- 『新訂増補国史大系十二』（新装版）（吉川弘文館、一九九九年）

- 松村博司『栄花物語全注釈七』（角川書店、一九七八年）
- 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進『栄花物語三』（小学館、一九九八年）
- 『増補史料大成五』一五二頁（臨川書店、一九七五年）
- 松村博司『栄花物語』と『後拾遺集』の関係（『中世和歌とその周辺』（笠間書院、一九八〇年）↓松村博司『歴史物語研究余滴』（和泉書院、一九八二年）
- 加藤静子『栄花物語』続篇の出羽弁―「かけまくも思ひそめてし君なれば―」（『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎、二〇一一年）
- 松村博司「出羽弁の生涯」（『南山大学アカデミア』一九七七年一月）
- 『袋草紙』・『宝物集』（新日本古典文学大系）、『今鏡』（講談社学術文庫）
- ◆第三部第一章
- 三角洋一『うたたね』追考」（『日記文学研究第一集』新典社、一九九三年）
- 渡辺静子『うたたね』における古典摂取の方法」（『女流日記文学講座6』勉誠社、一九九〇年）
- 久保田淳『西行全集』（日本古典文学会、一九八二年）
- 山口眞琴「享受と再編―『西行物語』の伝流と形成」（『西行説話文学論』笠間書院、二〇〇九年）
- 千野香織「『西行物語絵巻』の復元」（『日本絵巻大成26西行物語絵巻』中央公論社、一九七九年）
- 千野香織『日本の美術416号 絵巻西行物語絵』（至文堂、二〇〇一年一月）
- 徳川義宣「『西行物語繪巻』の成立をめぐる」（『日本絵巻大成26西行物語繪巻』中央公論社、一九七九年）
- 宮内庁書陵部蔵（函号二二三・六一）『西行一生涯草紙』（国文学研究資料館マイクロフィルム）
- 宮次男「研究資料 白描西行物語絵巻」（『美術研究』三三二号、一九八二年十二月）
- 伊藤嘉夫・久曾神昇『西行全集第二巻』（ひたく書房、一九八一年）
- 高城功夫「『西行物語』の典拠―特に『宝物集』との関わり―」（『西行の研究 伝本・作品・享受』笠間書院、二〇〇一年）
- 宮次男「研究資料 西行物語絵巻」（『美術研究』二八一号、一九七二年五月）
- 桑原博史『西行物語正保三年刊本（版本文庫6）』（国書刊行会、一九七四年）

- 桑原博史『西行物語全訳注』（講談社、一九八一年）
- 小島孝之『西行物語』の方法」（『中世説話集の形成』若草書房、一九九九年）
- 小松茂美『日本の絵巻19西行物語絵巻』（中央公論社、一九八八年）
- 横山重・松本隆信『室町時代物語大成 第五』（角川書店、一九七七年）
- 山崎淳『慶應義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』（『詞林』16号、一九九四年一〇月）
- 秋谷治『寛永本『西行物語』考―『西行物語』の原型を探る―』（『二橋論叢』八六―五、一九八一年一月）
- 蔡佩青『松平本系「西行物語」の成立について』（『古代文学研究』21号、二〇一二年十月）
- 松平文庫蔵（松一一五―八）『西行発心物語』・学習院本（九一三・六一―五〇〇八）『西行物語』（国文学研究資料館マイクロフィルム）。
- 廣田哲通『法華経』常不輕菩薩品第二十が生む説話』（『中世仏教説話の研究』勉誠社、一九八七年）
- 江口正弘『十六夜日記校本及び総索引』（笠間書院、一九七二年）
- 久保田淳『西行山家集入門』（有斐閣、一九七八年）
- 久保田淳『草庵と旅路に歌う西行』（新典社、一九九六年）
- 森本元子『十六夜日記・夜の鶴全訳注』（講談社、一九七九年）
- 外村展子『宇都宮朝業日記全釈』（風間書房、一九七七年）
- 外村南都子『信生法師日記』（『中世日記紀行集』小学館、一九九四年）
- 外村南都子『十六夜日記の周辺』（『国文学解釈と鑑賞』四六巻一号、一九八一年一月）
- 『法華経』（岩波文庫）
- 『東関紀行』（新日本古典文学大系）
- 久保田淳『西行全集』
- ◆ 第三部第二章
- 蔡佩青『松平本系「西行物語」の成立について』（『古代文学研究』21号、二〇一二年十月）
- 富倉徳次郎『とはすがたり』（筑摩書房、一九六九年）
- 島津忠夫『西行が修行の記といふ絵』をめぐって』（『とはすがたり』の諸問題』和泉書院、一九九六年）

- 徳川義宣「西行物語繪卷」の成立をめぐる」(『日本絵巻大成26西行物語繪卷』中央公論社、一九七九年)
- 阿部泰郎「観念と斗擲―吉野山の花をめぐる―」(『國文學 解釈と教材の研究』三九巻八号、一九九四年七月)
- 山田由美子「『とはすがたり』にみる西行の影響」(『立教大学日本文学』21、一九六八年一二月)
- 寺島恒世「『とはすがたり』後篇の起筆―卷四冒頭部の意味と機能―」(『日本語と日本文学』11、一九八九年六月)
- 西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『山家集／聞書集／残集』(明治書院、二〇〇三年)
- 福田秀一「『とはすがたり』」(新潮社、一九七八年)
- 三角洋一「『とはすがたり』たまきはる」(岩波書店、一九九四年)
- 久保田淳『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』(小学館、一九九九年)
- 篠田浩一郎「贖罪としての旅―へけぶり」と〈夢〉のテーマ」(『國文學 解釈と教材の研究』二四巻一〇号、一九七九年八月↓篠田浩一郎『仮面・神話・物語 ふたたび中世への旅』朝日新聞社、一九八三年)
- 久保田淳『新古今和歌集下』(角川文庫、二〇〇七年)
- 久保田淳『新古今和歌集全注釈五』(角川学芸出版、二〇一二年)
- 久保田淳『西行山家集入門』(有斐閣、一九七八年)
- 次田香澄『うたたね全訳注』(講談社、一九七八年)
- 次田香澄・酒井憲二『うた、ね本本及び索引』(笠間書院、一九七六年)
- 田渕句美子『阿仏尼とその時代』(臨川書店、二〇〇〇年)
- 片野達郎「『自讃歌』中の西行の歌―自然詠と恋の歌―」(『國文學 解釈と教材の研究』三〇巻四号、一九八五年四月)
- 久保田淳『新古今和歌集全注釈五』(角川学芸出版、二〇一二年)
- 久保田淳『西行全集』
- 『伊勢物語』(角川文庫)
- ◆第三部第三章
- 久保田淳『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』(小学館、一九九九年)
- 桑原博史『西行物語全訳注』(講談社、一九八一年)

- 三角洋一『とはずがたり たまきはる』（岩波書店、一九九四年）
- 今村みゑ子『発心集』『郁芳門院の侍良、武蔵の野に住む事』における抒情性（『鴨長明とその周辺』和泉書院、二〇〇八年）
- 太田由紀子『とはずがたり』における西行歌の受容（『金沢大学国語国文』14号、一九八九年二月）
- 阿部真弓『とはずがたり』におけるメタファーとしての月影―後深草院をめぐる―（『とはずがたり』の諸問題』和泉書院、一九九六年）
- 森本元子『二条院讃岐とその周辺』第一章・第二章（笠間書院、一九八四年）
- 西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『山家集／聞書集／残集』（明治書院、二〇〇三年）
- 森正人『涅槃経』（『岩波講座日本文学と仏教六卷』岩波書店、一九九四年）
- 『大正新修大藏経』十二卷（四八〇頁・九〇五頁）
- 『新編国歌大観 七卷』所収『伊勢大輔集』（流布本）
- 『発心集』（新潮日本古典集成）
- 久保田淳『西行全集』
- 『更級日記』（新編日本古典文学全集）

【論文の内容の要旨】

本論文では、中世日記文学のうち、特に後深草院二条の『とはずがたり』を中心に研究した。『とはずがたり』が二条の生涯を描く表現の特性を究明することを主眼とした。併せて、『とはずがたり』と関連する阿仏尼の作品についても研究した。二者の日記における人生と心性の表現を、主に中古・中世の物語や和歌の表現と比較することで、解明した。日記が物語や和歌の人物像・表現を受容する側面と、日記固有の人間像・人生観を表出する様相を明らかにした。

阿仏尼の作品を研究した第一部では、まず消息文『阿仏の文』における女房の心構え論を読解し、次に『十六夜日記』の贈答歌の表現性を考察した。

第一章では、『阿仏の文』において阿仏尼が宮仕えをする娘に説く、后がねの女房としての心構えを論じた。その心構えは、自らの発言を慎んで心情表出を抑制する姿勢であり、同時代の『十訓抄』の教訓とも共通する。『阿仏の文』では主君の寵が芳しからぬ時も「心長く」つまり気長に堪えて仕え、皇子を授かり育むのが肝要とされる。このよう

な心構えを備えた模範とされる「世継」の「三条の后」として、『栄花物語』が語る三条帝の皇后の藤原成子を比定した。また、『阿仏の文』は言行が「末通る」事、つまり貫徹する事を娘に求め、技芸・仏道を「底」即ち奥底まで極める事を勧める。以上の心構え論と『とはすがたり』が語る二条の宮仕えや出家後のありかたを比較し、『阿仏の文』は二条の生き方においても重要な心操を指し示していることを解明した。

第二章では、『十六夜日記』の鎌倉滞在記における阿仏尼と都人の文通に伴う贈答歌の表現性を考察した。贈答歌を、関連する勅撰集歌や『安嘉門院四条五百首』とともに読解し、贈答の歌語の反復と呼応によって生じる表現性を把握した。贈答の表現には阿仏尼の命の無常を想う心が投影されており、それと背中合わせに都人との再会と歌の家の継承を祈願する思いを都人と共有するさまを表すことが滞在記の執筆動機であることを解明した。また、滞在記の贈答集成という形式は、『康資王母集』における東に下った歌人が都人と交わす贈答歌群などを先例とするが、滞在記は照応する贈答の首尾一貫した編成によって共同の祈願を表現した点で独自性を有することを明らかにした。

第二部では、『とはすがたり』における二条と人々のえにしと生死の表現を研究した。『とはすがたり』がくり返し語るテーマである二条の父の死や、二条の遁世をめぐる葛藤、そして後深草院との宿縁を焦点とし、その表現性を解明した。第一に同日記と物語・説話の人物像の関連性、第二に日記の和歌表現という二つの視点から研究した。

第一章では、父の死をうけとめて生きる二条像の語り方につき、第一に作り物語との関連性、第二に父の死をめぐる石清水八幡の託宣の位置づけ、という二つの観点から考察した。第一に、父の死と二条の身の上について、中古・中世の作り物語が描く父の死とその娘の境遇を模倣して語る傾向を検証するとともに、その物語における女君が帝寵を受けて皇子を産む人生とは対照的に、二条が父の死を看取り、皇子を喪い、後深草院の寵の移るいに悩む前半生を独自に描く様相を把握した。第二に、その前半生の不幸を、後半生では八幡の託宣に基づいて、父の後生菩提のために引き受けた運命と捉え返す二条の人生観の変容を表すことが『とはすがたり』の執筆動機として重要であることを明らかにした。

第二章では、『とはすがたり』巻二で「傾城」と呼ばれる女性が後深草院の寵愛を失して遁世した逸話の意義を考察した。第一に、傾城の人物像と共通性のある中古中世の物語・説話の女性像を検討し、特に『なよ竹物語』の後嵯峨帝の寵を受ける里人の女が傾城に近い存在として描かれていることを論証した。第二に、傾城の遁世の機縁を示す「憂き

はうれし」という定型句につき、中世文学(説話、和歌等)における用法と『とはすがたり』における意義を検証した。『とはすがたり』では同表現の定型通りには遁世しがたい愛執を抱く人物像が描かれ、二条は傾城の遁世に憧れつつも後深草院との契りに執する存在として造型されていることを解明した。

第三章では、『とはすがたり』巻二の女樂の場面を中心に、琵琶をめぐる二条像の表現を検討した。琵琶は二条の父方の久我家の誇る芸能であるが、女樂で二条は家の芸の「面目」を傷つけられ、琵琶の緒を断ち、それを「思ひ切り」と詠う。「思ひ切り」という表現を焦点とし、第一に中世の音楽説話との比較、第二に中世和歌における同表現との比較を行った。第一に、「思ひ切り」は『文机談』で西流琵琶師範が家芸の「面目」を失って琵琶を断つことを表す例があり、二条の例と共通性が見いだせた。第二に、「思ひ切り」という和歌表現は、出家を意味するとともに断ちがたい執着をも表し、二条が遁世を願うが後深草院への愛執というほだしによって出家を果たせないことと通底する。総じて琵琶は二条の家の矜持と不遇、遁世願望と主君への執心の葛藤を表す媒体であり、琵琶への執念が『とはすがたり』執筆の動機の一つであるという結論に至った。

第四章では、『とはすがたり』で反復される歌語の表現性を検討した。第一に、「いつまで草」は、和歌や『栄花物語』で無常や夫の心の定めなさを示す表現史を背景とし、死の恐れや、後深草院の寵を頼む二条の宮仕えがいつまでも続かないという予感を示し、院の変心と出仕の終焉に至る軌跡を表すことを解明した。第二に、「なるみ」に関する表現は、『うたたね』にもみられ、身のなりゆきの不安を示し、二条の懷妊中に多く用いられて子や恋人との愛別離苦の予兆を示す傾向が見いだせた。第三に、「心の色」は、同時代における盛行や西行和歌の影響を受け、二条と男たちの恋情を示す表現であり、殊に巻四で院と二条が「心の色」の呼応によって宿縁を確かめ合う表現性が重要であると把握した。結論として、三つの歌語は二条と人々のえにしや死別というテーマを担い、その反復は二条の身の上を語る上で独自の表現方法であると位置づけた。

第五章では、『とはすがたり』巻五で二条が故人の形見への思いを詠んだ和歌の表現性を考察した。二条が亡き後深草院や父母の供養のために母の形見を手放す際の歌は、古歌における親を弔う貧女像を二条像に重ねることで、亡母への追悼を表す。父の形見を売る際の歌は、父の死の直後における二条の哀傷歌を連想させ、二条が哀傷を反芻しつつ亡父供養の志を確かめるさまを表す。院の形見の御影をめぐる歌は、帝王の御影に対する出羽

弁などの哀傷歌を先例とし、院に対する二条の追慕を表現する。以上の形見の歌は、死者と二条の宿縁にまつわる追想を表し、親の死から院の死に至る二条の生を回想する表現性を有することを解明した。

第三部では、『阿仏尼の日記と『とはすがたり』における西行和歌と『西行物語』の受容を研究した。西行は阿仏尼と二条の日記の表現を触発する存在として重要であり、特に『とはすがたり』は西行の歌と物語をふまえて二条の遁世後の旅や院への思慕、月のイメージを表現することを解明した。『とはすがたり』の旅・恋・月の表現における西行受容が阿仏尼の日記の西行受容と共通する側面も併せて指摘した。

第一章では、阿仏尼の日記における西行受容を論じた。まず、『うたたね』は女が恋の物思いを抱いて月をながめる心象風景を西行の恋歌に基づいて描くことを指摘した。次に、『十六夜日記』の路次の記は、『西行物語』の西行が天中川で打擲に耐えた逸話や、さやの中山を越える命の感慨を示す西行詠をふまえ、阿仏尼が無常を観じつつ旅を重ねる己が命のめぐりあわせを感受するさまを描くことを論証した。また、鎌倉滞在記では都人と阿仏尼の月を通じた交感を表す贈答が西行の旅の月歌の表現と通底することを解明した。

第二章では、『とはすがたり』巻四の東国下向の記事における西行の影響を考察した。まず、『西行が修行の記』(巻一)に描かれる西行像を『西行物語』諸本と比較して検討し、その西行像が巻四の旅立つ二条像に与えた影響を指摘した。また、二条の旅の表現における西行歌の受容方法を考察した。西行が歌において花を愛でてたゆたい、月をながめて都人を想い、煙に恋の物思いを託す表現をふまえ、二条が花の下にやすらい、月を見て都の旧主を偲び、煙に恋故の遁世の記憶を託すさまを表す手法を解明した。巻四の東下の記事は総じて、二条が西行の跡をふんで旅するとともに巻三までの過去を回想する道程を表すことを明らかにした。

第三章では、『とはすがたり』巻四・五における二条の後深草院への思慕の表現に対する西行の影響を論じた。二条が武蔵野、二見浦等を旅する折に詠んだ歌は、雲井に限なく照る月を仰いで都の院を思慕することを表し、西行が月をながめることで募る恋人・都人への慕情を詠んだ恋・旅の歌をふまえることを論証した。『とはすがたり』は西行歌に倣う月の表現を反復し、照応させることで、二条が院をその崩御に至るまで追慕し続け、院と共に在った自己の生の源を回想するさまを独自に表現していることを解明した。併せて、院を思慕する二条像は、『西行物語』などの西行説話で旧主を追慕する人物像と共通し、『山家集』で主君の崩御を悼む哀傷歌を詠む女房像とも接点を有することを明らかにした。

